シリーズ・開業

住居つき診療所

栗村理恵
くりむらクリニック

瀬谷駅南口（相鉄線の各駅の中で最も開発が遅れていることでは有名！）近くに、平成14年５月、くりむらクリニック（皮膚科、アレルギー科、歯科）を開業致しました。歯科は私の夫が診療しており、週に１回、自由診療のみなので患者さんは今のところ親戚一同！という感じです。

私は平成元年に東京女子医科大学を卒業し、附属第二病院内科に入局、研修医２年間は内科学全般を学び、３年目から某大学の呼吸器内科へ出張が予定されていたのですが、諸事情により平成３年、同病院の皮膚科に転科しました。皮膚科に入局してからは実にいろいろなことがあり、皮膚科学以外にも多くのことを経験し学びました。

入局初日からTENの患者さんの処置で、ものすごーく怖い先輩に清潔不潔操作を怒鳴られながら教えてもらいました（私と同期の子は悔しくて、なんと病室のゴミ箱を何度も蹴っていました）。平成５年には原田敬之教授が着任され、真菌症の患者さんはもちろんのこと、多種にわたる患者さんを経験することができました。原田大大大先生はとてもユーモアのあるお方で、いつも楽しく学ばせていただき、お顔を拝見するだけでホッとしました。まだまだ原田先生の下で勉強したかったのですが、実家を建て直す話が進み、タイミング的に今しかないと思い、生まれ育ったこの瀬谷の地で開業に踏みきりました。大学病院を退職してからの日々（約３カ月間）は大忙しで、スケジュール帳は真っ黒でした。開業前の準備はすべて１人で決め、何もかもしていたのでミスも多く大変な思いをしました。スタッフ募集は広告に年齢制限をいれなかったのが失敗で、上は65歳まで100人近くもの応募があり、履歴書を見るだけで大変でした。

１階が診療所で２階は住居という造りで、細長い土地の為、設計は１級建築士にお願いしました。しかし、１階の床はボコボコでめまいがしそうですし、雨漏りも繰り返しています。おまけに２階で子供たちが走り回る足音が響き渡り、診察中に患者さんと天井を見上げてしまいます（こんなはずではなかっ

待合室にて。後列左から、歯科・栗村実（私の夫です）、私、事務員の西村さん。前列左から、藤本さん、酒井さん。３人の平均年齢、26歳です

たのに……)。今回、１級建築士とのお付き合いの中で、施主の話に耳を傾けず、デザインを優先し、自分の意見を通してしまうことの問題を強く感じました。私の患者さんへの反面教師として学ぶ機会でもあったと捉えています。

瀬谷はなぜか今まで皮膚科専門の開業医がいなかったので、ありがたいことに近くの先生方には患者さんをたくさん紹介していただいております。それだけに責任重大と痛感しております。特に内服薬を処方する時にとても神経を使うようになり、副作用や相互作用などを再確認しつつ慎重に投与しています。

また、患者さんをお願いする場合は、近隣の聖マリアンナ横浜市西部病院や国際親善総合病院の先生方に大変お世話になっております。この場をお借りして感謝申し上げます。

スタッフは事務員３人で、面接とクレペリン検査の結果で選びました。この検査は心理の先生に判定していただくのですが、意外なことまでわかるのでお勧めです。３人のチームワークがとても良く、皆明るく元気なので、患者さんにも評判が良く助かっています。

看護師さんはいないので、採血や処置はすべて自分でやっています。幸い採血は大好きで、血管が細くいつも苦労されているような方の場合、俄然、燃えてしまいます。

夕方の待合室では、時々我が息子（４歳、次男）が患者さんに紛れ込んで、椅子に座り大声で歌を歌いだします。子供との時間を増やし、学校の行事にも積極的に参加することが開業の１つの目的だったのですが、なかなか思うようにはいかず、ストレスはたまる一方です。さらに、私は典型的な緊張型頭痛を起こしやすく、肩こりのひどさも半端ではありません。普段は長男（９歳）に肩もみをしてもらい（これがかなり上手！）、２カ月に一度くらいの割合で家族と温泉へ行き、上げ膳据え膳、温泉に浸かってからマッサージを頼むのが、今のところ私のストレス解消方法になっています。心と時間のゆとりを持つことがいかに大切かがよくわかります。これからもあまり気張らず、カリカリせず仕事と家庭を両立させていきたいと思います。皆様どうぞよろしくお願い致します。

開業して

杉田泰之

「研究日」も「朝からマック」もほとんど縁のない万年助手生活も卒後15年になろうとしていた私を、池澤教授は着任早々講師にして下さいました。そのご恩返しもできないうちに２年後の平成13年12月、一身上の事情で横浜市大を退職しました。翌年２月開業の予定でしたが、私の退職の直前に家内は切迫早産で入院してしまい、開業までの約３ヶ月間、保育園児をかかえた父子家庭は緊迫した開業準備生活に入りました。長男の保育園の送り迎えと、様々な業者との連絡や打ち合わせであちこち飛び回る毎日で、大晦日にはなんとギックリ腰になってしまいました。

開業を決意したのは退職の約１年前で、それまでのわずかな貯金はマンションのローンの返済にまわしていたため、先立つものがなく苦労しました。また、今や都市部は開業の余地を見つけることがなかなか困難です。元々自分で納得しなければ満足できない性格だったことと、コンサルタントを頼む経済的な余裕がなかったので、私はすべて自分で開業の準備をしました。開業の場所については、まずは皮膚科専門医のいない駅をさがしたのですが、医局の先輩の杉本先生の医院と同じ保土ケ谷区内に、西谷というなんとなく開発の遅れた場所を見つけました。名前がまぎらわしく、同じ沿線なので杉本先生には大変ご迷惑をかけているとは思いますが、「こちらは空いてる！」と喜んでくれる患者さんもいます。

クリニックは相鉄線西谷駅から徒歩５分の西谷商店街の中にあります。商店街はスーパーが１軒ある以外はこぢんまりとしており、タイムスリップして

時代に取り残されたような不思議な商店街です。スーパーのレジでおばあさんが財布を差し出して、店員が中から代金を取って財布を返す光景が見られる町です。

私のクリニックでは電子カルテを導入しました。紙を使わないのでカルテスペースが不要で、見たいカルテを瞬時に画面に出すことができます。県内のこの電子カルテの先駆者である藤沢の松井先生に見学させていただき、その内容のすばらしさ（私はいまだに機能を十分使いこなしていませんが）に感動してすぐに導入を決めました。ただし大手メーカーの電子カルテではないので、導入費用が安い反面、自己責任でパソコンを管理する必要があり、保険改定の際などはインターネットからダウンロードした資料を自分で組み込む必要があります。

先日駅の階段を駆け下りた際、不覚にも足をくじいてしまいました。相当激しくねじってしまい、足首が青く腫れ上がり、歩くのもつらい状態がかなり長く続きました。一部骨折でもしていたのかもしれません。平日は木曜の午後しか休診がなかったことと、もしや骨折があるから入院などと言われるのが怖くて、結局整形を受診しないまま自然治癒しました。開業医は自分の体だけがたよりだということを痛感しました。

開業準備から現在にいたるまで、多くの先輩や地域の先生方に様々な面で助けていただき、心から感謝しています。日常の診療は、診療内容も患者さんの反応も大学とは異なる面もありますが、まずは患者さんのためになる医療を心がけ、少しでも地域医療に貢献できればと思います。今後ともよろしくご指導のほどお願いいたします。

父

上村仁夫

わたしは雪深い新潟の田舎に育った。一応国道117号が走っているのだが、冬ともなればその国道は50センチほどの道幅になり、当然車は走れず人間同士がすれ違うのにさえ道を譲る必要があるほどであった。そんな田舎で父はある病院に内科医として勤務していた。父の帰りはいつも遅かった。毎日のように往診があり、冬は当時アノラックといったフード付きの防寒具を着こみ、暗い夜道、降りしきる雪の中を真っ白になっての道行であった。患家からの迎えの者がいるときは良いが、そうでないときは重い往診かばんを背負っての辛い雪道であった。その父の往診風景があるテレビ番組で放送されたことがあった。そんな父の姿がわたしにとっての父に関する原風景である。もう45年以上前のことである。

父は4代目の医者である。そんなこともあってことあるごとに、わたしは周囲の人に「大きくなったらお父さんの跡をつぐんでしょ」「5代目のお医者さんになるんでしょ」と言われ続けてきた。そして中学に入るときにわたしは東京の祖父母の家に預けられた。医者になるにはこんな田舎の学校ではダメだというわけである。そして千代田区の中学校に入学した。そして3年後都立高校に入学した。その頃母と弟が新潟から出てきて一緒に暮らすことになった。父はまだ新潟にいた。そして高2のときに父も上京し、しばらく友人の病院で勤務医をしたのち、東京の府中市に内科医院を開業した。かなりの借金があったはずである。

高校時代のわたしはかなりの落ちこぼれの生徒であった。生まれて初めて零点をとったのもこのときである。当時のわたしにはこれといった目標もなく、高校を卒業したら北海道の牧場にでも拾ってもらうつもりでいた。医者になろうとはまったく考えていなかった。これは父に対する、そしていつも医者になることが当たり前のように周りの人に言われ続けたことに対する反発であったのかもしれない。そんな夏休みのある日、東京女子医大の学生であったいとこがふいに尋ねてきた。解剖実習などのいろんな話をしているうちに、急にわたしの胸に医者もいいかもしれない、という思いが湧いてきた。その後受験に失敗し、浪人生活の後に何とか医学部に合格す

ることができた。そして大学６年時に卒後の専攻科として皮膚科を志望したと父に報告したとき、父は特に反対をしなかった。そしていざ開業するときにわたしは父の内科医院のある住宅街では皮膚科は無理かろうと思い、大学近くの海老名市を開業場所に選んだ。

父は多分専攻科目を皮膚科にしたとき、開業場所を海老名にしたときにかなりさびしい思いをしたに違いない。それは父にそろそろ開業も考えているんだと話したときに、「内科もチョットやってみないか」と父はボソリと言ったことから窺い知れる。わたしは「いまさら無理だよ」と一笑に付してしまった。その父も今はいない。平成4年に肺癌でこの世を去った。数ヶ月間に400人もの成人病検診をやり、Ｘ線撮影、そして現像もすべて１人でこなした。父の死後、ひっそりとした父の診察室を覗いてみると、ホコリまみれになったＸ線のプロテクターが部屋の片隅に転がっていた。忙しさの余りプロテクターを着ける暇もなかったのであろう。

父の死後ふと気づいたことがある。あの夏休みのいとこの来訪がなければわたしは医者になっていなかったであろう。なぜあの時いとこはふいに尋ねてきたのだろう。これはわたしの想像であるが、目的もなくぐうたら生活をしていたわたしに業を煮やした父が、密かにいとこに頼みわたしが医業に興味を持つようにしむけたのではなかったのか。そんな気がしてならない。

父は生前、俳句をたしなんでいた。死後その句集を見る機会があった。

診察の手の冷たさを詫びもして（昭和57年）
臥す人の見上ぐる笑顔壇の雛（昭和59年）
医師なれば往くを厭はず凍つる夜を（昭和60年）

開業して12年、結局わたしの目指しているものは父そのもののような気がする。

家族旅行（左より妻、長男、長女、私）、イタリア・フィレンツェにて